

サトリの  
ココロ

[月1連載]

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、  
仏教に興味を持つ人が増えています。  
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法——

日蓮宗常照寺住職  
奥田正叡さん

第12回

# 外見の美しさの奥に潜む 内面の美しさが大切です



おくだ・しょうえい 昭和30年生まれ。中央大学卒業後、仏教を学ぶべく立正大学に進学。僧階単位取得後、日蓮宗総本山 身延山久遠寺にて修行。同寺山務を経て平成11年常照寺住職となる。茶道裏千家教授。京都を中心とした超宗派の会「薄伽梵KYOTO (バガヴァンきょうと)」メンバーとして病院法話活動、また京都刑務所教誨師などの社会活動にも積極的に取り組む。

現代女性が  
見習いたい  
内面の美しさ・強さ

また、寺内にある茶席「還芳庵」には、壁いつばいの大きさに円窓があります。吉野太夫が好んだことから「吉野窓」と呼ばれている窓。よく見ると、円の下部が少し切り取られた形です。これには、「完全な円は仏や悟りを示す。円の一部を欠くことにより完成していない、悟っていない自分への戒めとする」という太夫の思いがあるように思えます。大胆な中にも自省心を忘れない吉野の篤い信仰が伝わる窓です。

吉野太夫は26歳のとき、京商人の灰屋紹益に身付けされました。紹益もまた熱心な法華経信者。そして風雅な文化人でもありました。和歌や書画、華道、茶湯、琴などの諸芸に優れ、一流の教養を持つ吉野太夫と結ばれたのも納得です。しかしこのとき、紹益は遊女をめとつたことで親に勘当され、二人は駆け落ち。後に紹益の父が吉野太夫の控えめな侍まいや振る舞いに感服し、勘当を許したといわれます。これは歌舞伎「桜時雨」としても知られる物語です。

そんなエピソードでも知られるとおり、吉野太夫は内面も美しい女性でした。太夫になるための並々ならぬ努力からくる、こまやかで深い情や芯の強さ……おごりではなく、内面の美しさがあつた

桜の見ごろに行われる  
吉野太夫の「花供養」

吉野太夫は38歳で病死。はかなき花のような短い生涯でした。常照寺には、その吉野太夫が眠るお墓があります。そして毎年4月には、吉野太夫を供養する「花供養」を行つています。

今年ももうすぐ桜の季節。教養高く、凛として美しい吉野太夫は現代女性の鏡となるでしょう。そんな太夫に思いを馳せ、桜の京都にいらつしやいませんか？

からこそ、自信が持てたのです。また、法華経によつて救われるという精神的な安心感も、心を充実させていたに違いありません。外見の美を支えた真の美しさが内にあつたのです。

それに比べて、現代の女性はどうでしょう？ 外見はいくらでも美しくできますが、内面は……？ 真の美しさは見た目ではない、内面を磨くことこそが大切だということに気づくことが大事です。そこには「いかに充実していくか」「いかに生きるか」という人生のヒントも隠れているのです。



今年の花供養は4月10日(日)。吉野太夫の墓参りのため、現役の太夫による道中が行われます。